

現代華北農村における個人を結ぶ紐帯・協力関係・集団

—中国社会の個性についての考察—

小 田 則 子*

Characteristics of Chinese Society: Social Relationships, Cooperation, and Grouping in Modern Rural North China Communities

Noriko ODA*

はじめに

1. 華北における農村調査
2. 華北農村の変遷と農民を結ぶ社会的な紐帯
3. 農民の協力関係にみる共同性
4. 集団の論理と公平の含意
5. 対人感情の社会化

おわりに

はじめに

宋代以降の歴史的な中国は、皇帝への権力の集中、科挙により選抜された官僚群が担う国家機構、村や近隣から市鎮、さらに県を越えた広域社会へと連なる地域社会、民衆反乱の急速な勃興とその容易な瓦解、などにより特色づけられる。こうした重厚な国家を伴った複雑で大規模な社会をどのように捉え、認識していくかは、困難ながら魅力ある課題である。皇帝政治、官僚制、地域社会、民衆反乱などの諸表象の内奥に働く、中国的な原理性とはなんだろうか。中国近代経済史を分析した村松祐次氏は、中国経済全体を一つの競技に喩え、そこでは「競技者」(経済主体)が、中国に特有の「競技規則」(国家の法や地域の慣習など、経済主体を外的に規制する社会規範)のもとで、「チームを編成」し「ポジション」を決め(商取引や農業生産の社会組織、人間関係を形成し)、全体の経済態制が編成されていると述べている(村松祐次、1949: 12～21)。この比喩を借りれば、中国社会

*中部大学非常勤講師

という競技において、他でもない中国的な「ゲーム」を展開する「ルール」や、「チーム編成」の原理的な内容とはなにかということになるだろう。

その答えの一つが、個人を中心として拓がる社会結合の紐帯という理解である。すでに新中国が成立する以前に費孝通氏は、水面に浮かぶ波紋のように「己」の周囲に拓がる、序列的な人間関係（「差序格局」）について述べている（費孝通、1948[1985]、23～24）。また王崧興氏は、血縁、近所、師弟、同窓、同僚、同郷などの同類にもとづいた「関係網」の繋がりを指摘し、「関係網」は時として結束して集団となるが、結束のメリットが消滅すれば、また同類の「関係網」に戻る（「関係あり組織なし」）という動態的な考察を提示している（王崧興、1987）。こうした中国人研究者の経験的な知見と、社会人類学的な視点から導かれた中国社会を理解する方法は、いずれも個人を中心としてその周囲に拓がる他者との複合的な紐帯、その選択的な活用による生存戦略などを指摘しており、それらの結びつきは親族関係の範囲にとどまらない。人間関係における「個」の重要性は日本人研究者も指摘する所で（末成道男、1983）、近年では佐々木衛氏が「分化と統合」を生み出す「個人対個人の絆」を、村や民間宗教集団のなかに検証をしている（佐々木衛、1993）。

以上の中国社会を理解する方法は、1980年代以降、中国明清史研究にも影響を与え、訴訟などの地域社会における紛争の分析（中島楽章、2002）や、社会的な上昇を狙い防衛的に結束する宗族の考察（上田信、1995；山田賢、1995）などにおいて成果を挙げてきた。しかしその場合、基層領域の構成として実体的に解釈される傾向にあり、皇帝支配や官僚制などの上部構造については、現在まだこうした理解との接点をあまり持っていないと思われる。もし歴史学の立場から、先の個人がとり結ぶ社会的な結合紐帯に関心を寄せるとすれば、そうした組織原理は、市場や貨幣流通、支配階層などのなかにいかに浸透しているのか、あるいはそうした原理性を踏まえて、村や広域社会などの構築物がいかに組みあがり、独自の国家の「かたち」を形成しているのかという問題として表現できるだろう。

本稿ではこうした問題を検討していく初歩的な作業として、個人対個人の結びつきや紐帯によって築かれる建造物としての、集団と共同性の特質を考察したいと思う。集団と共同性の問題は、歴史的な村や地域社会の理解という課題と結びついている。先に示した費孝通氏や王崧興氏の提言は、西欧の団体や日本の「場」の論理と対置しながら、どちらかという個人の繋がりの方に考察の重点が置かれているのであるが、ここでは人々が協力関係を結び、結束していく側面に焦点を当てて、その中国的な「かたち」を取り出してみたいと思う。またその際、できる限り中国内部の考察から導かれた諸論理を使用して考察を進めることとする。これはまず、中国自身の視点から中国的な発想によって、当該社会を認識してみようという意図にもとづいている¹⁾。

なお本稿では以下、現代中国の農村調査資料を用いて考察していく。現代中国の資料を利用するのは、伝統中国では、個人の社会的な結合のようなミクロレベルの考察を可能とする資料が限られているためである。中国的な社会の仕組みが、長期的な持続性を持つと考えるならば、こうした共時的な手法もまた許されるであろう。

以下では、まず資料として使用する華北農村の調査文献について解説したうえで、現代中国の社

会変動のもとで生き続けた個人の社会的な紐帯が、どのような性格を持つものなのかを検討し、華北農村における協力関係のなかに顕現する共同性、集団の構成や秩序の様相について、順次考察を進めることとしたい。

1. 華北における農村調査

次章以下の考察で使用するおもな農村調査資料は次のものである。①三谷孝編『農民が語る中国現代史』。②三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家—華北農村調査の記録—』第一巻、第二巻。①は1990年に北京市房山区呉店村において実施された農村調査の記録であり、②は1990年から1995年において、北京市順義県城関鎮沙井村、河北省欒城県孟董庄郷寺北柴村、天津市静海県府君廟郷馮家村、山東省平原県十里鋪郷後夏寨村で調査された記録である。これらの調査は中国農村慣行調査研究会(研究代表者は三谷孝一橋大学教授)と南開大学歴史系(研究代表者は魏宏運南開大学教授)の共同調査として企画され、日本側から三谷孝氏の他に、内山雅生、笠原十九司、佐藤宏、末次玲子、中生勝美、浜口允子、リンダ・グローブの諸氏が、中国側からは魏宏運氏の他に、左志遠、張洪祥の両氏が参加した。筆者も②の調査に研究協力者として参加している。

中国における実地調査は1980年代以降、外国人研究者と中国人研究者との共同研究という形態のもとで可能となり、華北地域についても短期の訪問から数年にわたる調査までいくつかの企画が実施されてきた²⁾。①と②もそうした実地調査の一つであり、とくに①と②には次のような特色を指摘することができる。

第一に①と②は、1940年から1944年に実施された「華北農村慣行調査」の再調査としての位置づけを持っていることである。「華北農村慣行調査」とは、戦中に東亜研究所「第六調査委員会」が企画立案し、満鉄調査部の現地協力を得て、河北省と山東省で実施された農村調査である。この調査は、それまで日本の支配領域で立法と実務のために行われた旧慣調査とは異なり、「中国社会に行われてゐる慣行を明らかにすることによつて其社会の特質を生けるがまゝに画き出すこと」(中国農村慣行調査刊行会、1952：1-22)をめざして、法社会学的な方針で立案された学術的調査だった。その成果は現在に至るまで、アメリカ、中国の研究者からも高く評価されている。その調査方法は、村落、家族、土地売買、小作、公租公課、農村金融及び取引などについて、調査員が農民から直接聞き取りを行う問答形式を採り、調査資料は「質疑応答録」として残された³⁾。この「華北農村慣行調査」で調査村となったのが、先の呉店村、沙井村、寺北柴村、後家寨村の他に、山東省歴城県冷水溝莊、河北省昌黎県侯家營の6つの村であった。

しかし第二に、①と②の再調査は、「華北農村慣行調査」とは異なる構想で実施されている。三谷氏はこの調査の目的を、「激しい変革の連続であつたこの五〇年間の村の変遷史を、村民の生活の変化という視点から村民自身の証言に基づいて描き出すとともに、華北農村社会と農村変革の特質を考察することにある」(三谷孝編、2000：3)と述べ、村と農民生活の歴史、そこに現れる華北農村社会の特質を調査対象としていたことを語っている。この調査に参加した者の多くは中国近代史を専門としており、時系列の因果関係を探ろうとする歴史学的な観点が反映されているといえよう。

また「民衆の生活史」という視点は、調査内容のなかに、村落政治や農村経済のみでなく、女性、教育、宗教・信仰などの文化的な事項への関心を含むこととなった。そのため「華北農村慣行調査」の社会経済的な調査項目の設定とは異なり、村落の詳細なモノグラフを描くコミュニティ・スタディの手法にも接続した内容を備えている。

さて以上のような本稿の調査資料について、その利点と注意点についても考えておきたい。まず利点は、これらが中国の平均的な村の調査記録と考えられることである。「華北農村慣行調査」の調査村は県城に近く比較的治安のよい村が選ばれた。しかしその選定は片寄ったものではなく、商品経済化、地主・小作人関係、宗族結合などの指標について、進展の程度が様々に異なる村が結果的に配置されることとなった。このことは1990年代の再調査においても、農業生産や農家副業などの経済面、村落政治や村落の結束の程度、民間信仰と年中行事、宗族などの伝統的要素、女性の地位などにおいて、いくつかの異なる程度と類型を示す村の調査となって実現した。つまり多様でかつ平均的なデータの取得に成功したと考えられる。とくに外国人による中国の調査研究において、「模範村」を対象とすることによるデータの歪みを免れていることは重要であろう。

しかし調査に問題がないわけではない。①、②の調査では各村について多面的なデータを獲得できたものの、全体として「村落社会」という華北農村の従来の理解に、ほとんど修正を加えられなかったことである。農民生活の諸局面が村の範囲で完結的に営まれるとする見方は、「華北農村慣行調査」によって形成されたものである。「華北農村慣行調査」では企画段階で村について、「祠堂・神廟・寺観及び祭祀・演劇とその村落結合作用」「村落内の司法」「村の財政」「村の財産及び債務」といった調査項目を設定しており（中国農村慣行調査刊行会、1952：1-44～48）、中国の村を日本のムラとの比較において団体と想定していたことが窺われる。また調査時における治安の悪さは、村の外部への農民の往来や物的交流を低下させていたであろう。つまり「村落社会」という理解には、「華北農村慣行調査」が依拠した理論と歴史的条件を考慮する必要があるのである。実際、①、②の調査では、農家副業や村の企業の経営、婚姻関係など、村の外部にまで伸びる人的結合、あるいは人民公社時代における数村に渉る下部機構などが、農民からの聞き取りによって明らかにされている。しかしこうした事象は、村の開放的な構造と結び付けて意識的に取り上げられてはおらず、結果的に「村落社会」という従来のイメージを受け継ぐことになってしまったと考えられる。旗田巍氏が提唱した中国的な村の形態を摘出する理論と調査方法が、課題として残されているのである（旗田巍、1973：167）。

最後に、次章以下で登場する後家寨村、寺北柴村、馮家村、呉店村、沙井村の調査時点における概況は次のとおりである。

（1）後家寨村

人口844人（1993年）、世帯数189戸、村の耕地は1850畝。農民1人当たりの年間純収入は590元（1992年）。おもに農業で生計を立てる村である。生産責任制で、綿花・小麦・トウモロコシを栽培する。村ではカゴ編みや絨毯織りの家内副業、養鶏や牛の飼育、果樹栽培、運輸業などが見られ、とくにカゴ編みは農家の重要な収入源となっている。

(2) 寺北柴村

人口1409人(1994年)、世帯数213戸、村の耕地は2079畝。農民1人当たりの年間純収入は855元(1994年)。農業と副業経営で生計を立てる村である。農業は生産責任制で、小麦とトウモロコシを栽培する。村に村営企業はないが、農民の自営業や副業(小売や卸売り、運輸業、飲食店経営、練炭製造、服飾加工、漆喰製造、建築隊、養鶏・養豚)が盛んで、一家の主要な働き手は副業に従事する場合が多い。

(3) 馮家村

人口637人(1991年)、世帯数173戸、村の耕地は1200畝。農民1人当たりの年間純収入は1400元(1991年)。農業と郷鎮企業での労働で生計を立てる村である。農業は生産責任制で、小麦を栽培する他、野菜の温室栽培(豆・ピーマン・キュウリ)が盛んで海外に輸出する。自動車部品を製造する村営企業があり、約40人が働く。また近辺の府君廟鎮や静海県城の郷鎮企業に勤める若者も多い。

(4) 呉店村

人口700人(1990年)、世帯数200戸、村の耕地は525畝。農民1人当たりの年間純収入は1250元(1990年)。農業と村営企業での労働で生計を立てる村である。農業は生産責任制だが、分配される土地が1人当たり0.7畝と零細なため収益率は低い。村営企業には飯店、建築隊、製材工場、建築資材工場、技術加工工場があり、約100人が働く。村人の個人企業はなく、また近辺の北京市へ働きに行く者は数人にすぎない。

(5) 沙井村

人口635人(1995年)、世帯数213戸、村の耕地は300畝。沙井村がある順義県の農民1人当たりの年間純収入は1508元(1992年)。村営企業と県城の郷鎮企業での労働で生計を立てる村である。農業は集団農場の形態をとり、農家の個別経営はない。村営企業には500人が働く服装工場があり、また村の敷地には県の工商局が運営する木材卸売り市場がある。村は順義県城に近く、ほとんどの働き手が県城の郷鎮企業や商業に勤める。村には250～270人の外来者も寄住している(1993年)。

なお以下の記述では、調査資料にある農民のお名前と年齢(調査時)をそのまま掲載させていただいた。これは事実関係を明確化するためである。また記述の便宜のため、敬称は省略させていただいた。インフォーマントとなった農民の方々には、感謝の気持ちを記しておきたい。

2. 華北農村の変遷と農民を結ぶ社会的な紐帯

農村社会において、宗族(父方の親族関係)の紐帯のみでなく、親戚(婚姻関係により生じる親族関係)、友人、近隣などの間で結ばれる農民どうしの結びつきが、耕作や家畜の飼育、結婚式や葬式、家の新築、借金、商売などの農民生活の様々な局面において重要な役割を果たしていたことを、多くの考察が指摘している(深尾葉子・安富歩、2003;内山雅生、1990:第4章)。そうした指摘は、農民の生活が宗族や村などの団体により保護、規制されるというよりも、個人を起点として広がる人間関係の私的なネットワークのなかで成立し、農民が「実力的均衡関係」(戒能通孝、1943[1977])

のなかにあったことを示している。まず調査村における農民の結びつきを見てみよう。

1940年代の後家寨村では、東北地方への出稼ぎが農民の生計を補填する重要な手段だった。当時の後家寨村では、農民の60%が10畝以上30畝未満の所有地を持っていたが、县城から離れ商売や雇用の機会を欠いていた。後家寨村の王金見（84歳）は次のように言う。問い：「初めての[出稼ぎの]時はどのようなつてを頼って行ったのか」、答え：「知り合いの関係だ。貧しい者は貧しい者を助けなければ友達とはいえない」⁴⁾。また同村の王偉章（年齢不明）は「搭伙做売買」という結びつきを述べている。「解放前には、搭伙做売買という言葉があった。自分の金が少ない時、他人の金と一緒にして商売すること。家畜や綿花の売買に利用された。農具もある農家が所有して、他の農家が持っていなかったら、共同で使い、新たに購入することはなかった」⁵⁾。「華北農村慣行調査」では、耕作における家畜や農具の貸し借り（「搭套」）、農家相互の労働力の融通（「換工」）といった農民の協力関係が多数述べられている⁶⁾。沙井村は1940年代には、土地なし農家と所有地10畝未満の農家が60%を占める貧しい村で、2～3戸から数戸の農家が協力して「搭套」がしばしば行われた。この結びつきは同族、隣人を問わず、「まず『親しい』者同志であることが搭套の必須条件である」（内山雅生、1990：141）という。村や宗族の結合が脆弱だった旧社会の華北農村において、農民を取り巻く人間関係は単なる生活の便宜のみならず、転落への安全弁の役割を果たしていたと考えられる。

新中国成立後、農業集団化から人民公社の成立によって農民の生活は大きく変化する。統一国家の成立は農民に最低限の法的保障を与えた反面、国家意思が個々の農民レベルまで浸透していった（田中恭子、1996：421）。耕作は集団の指示のもとに行われ、村（生産大隊）は公社の下級組織として医療・教育・娯楽などを農民に提供した。しかし村は農民の生活全般を保護し保障する機構ではなく、むしろ政策の頻繁な変更と政治運動が農民の生活を翻弄した。こうした状況では依然として、個人の人間関係が社会を生き抜く重要な要件となっている。後家寨村では1960年の「困難な時期」（大躍進政策の失敗後の自然災害と大飢饉）に食べ物が入らず、大勢の人が上海・南京・蘇州・杭州へ行き、商売をして糊口をしのいだ。当時を知る馬会祥（74歳）は、問い：「あなたは一人で行ったのか」、答え：「五、六人で行った」と述べている⁷⁾。寺北柴村では文化大革命の頃、郝丙晨とその家族3人、郝小奎・郝中奎の兄弟とその母親の2戸の農家が家や家具を売り、東北の瀋陽に出て行った。「郝中奎は解放前に瀋陽にいたことがある。そこに知人が多かった」（劉繼晨、72歳）⁸⁾。公社時代、農民は現金をほとんど持つことがなく、結婚式や葬式では借金が必要となった。問い：「当時、[結婚式で]親戚や友人から借金した場合、利息はいらなかったでしょう」、答え：「いらなかった」（馬会祥）⁹⁾。また馬会祥は「人民公社後、現在まで互助協力はあるか」という問いに、「ある。牛や馬の共同購入はなくなったが、親戚の間には結婚や家の新築などで助け合いが多い。人民公社時代にも、友好関係と呼ばれていた」と答えている¹⁰⁾。この「友好関係」は村の幹部（役職者）が按配するのではなく、「あくまで個人の関係だ」という。社会主義の体制のもとでも農民の人間関係は様々に機能していた。

改革開放政策以降、人民公社の崩壊と農村経済の市場化に伴って、農民の生活から政治的な統制が希薄化し、農民は流通領域へ参加して営利や起業の機会をもてるようになった。そうしたなかで副業経営や商売のパートナーとして、農民の人間関係は活性化している。寺北柴村の郝元増（38歳）

は、1982年から91年まで同じ宗族の郝同順(52歳)と「仲間になって」運送業をしていた。問い：「何故他の人と一緒に[トラックを]買ったのか」、答え：「我々は小さい時から関係がよく、彼は私の性格を知っていた。…その後、彼は私に大隊のトラクターを運転させた。そんなことで我々の関係はとてもよかったのだ」¹¹⁾。運送業の起業を支えたのは、同じ宗族でも「関係がよい」という間柄だったことがわかる。また寺北柴村の隣村の北五里舗の馮軍五(58歳)は、次のように述べている。問い：「工場を始める時は、同姓を中心とするのか」、答え：「同姓とは限らない。大事なのは知り合いであるということで、一緒に仕事を始める。初めて工場を作る時などは、友人や隣人同士が多い。やがて仕事が発展して、収入が多くなると経済的矛盾が発生し、分裂していき、自分だけで、または兄弟だけで経営するようになる」¹²⁾。この応答では、起業の際の資金調達や情報・技術の入手ルートとして友人や隣人が重要な役割を果たすが、そのパートナーシップは流動的で企業として制度化されにくいものであることが示唆されている。この他に多くの事例が「知り合い」、「親戚」、「人間関係」の重要性を述べている。自動車部品を製造する馮家村の村営工場は北京の工場から発注を受けるが、「これは親戚や友人の関係を通じたものだ」(孫長喜、49歳)という¹³⁾。沙井村で材木業を経営する張遠祐(57歳)は、「私は城関鎮京成木材工場で仕事をしていたとき、多くの木材の商売をする人と知り合いだったし、木材産地の人とも知り合いだった」と述べている¹⁴⁾。また沙井村でモヤシの製造販売をする李宗平(32歳)は、銀行が個人経営者に融資しないので、流動資金を利息の高い個人から借りている。「しかし個人の間での借金は、おもに人間関係が頼りで、熟知していない人からは借りられない」¹⁵⁾。

こうした経済的な結びつき以外にも、個人の紐帯は様々に現われる。寺北柴村の蘇春英(54歳)は信心深く、1990年に村に老母廟を再建する発起人となった。問い：「あなたと[一緒に老母廟の再建に協力した]張蓮芝、二妮はどのような関係か」、答え：「私たちは大変仲良くしていた。張蓮芝は私の家の近くに住んでいる。二妮とは喧嘩をし、現在行き来をしていない」¹⁶⁾。また沙井村は順義京城や北京に近く「他の村より生活がよい」ので、戸籍を移して転入する外来戸(外来者)が多い。彼らは上級の者とコネがあり、沙井村の書記はその転入を拒めないという。問い：「それは裏口か」、答え：「裏口だ。『関係』があるのだ。上に人がいるのだ」(張樹徳、64歳)¹⁷⁾。個人の紐帯が生活の多様な側面で息づいていることがわかる。

それでは以上の事例で頻繁に現われる「関係がよい」、「熟知している」、「仲良くしていた」という意味内容はどのようなものだろうか。フリード氏は個人を結び付ける強い紐帯を「感情」(ganqing)という言葉で説明している。彼は南京近郊の滁県の考察のなかで、親族関係とそれを越えて個人の紐帯が結ばれる関係とを考察し、後者における情誼関係の重要性を述べている。例えば小作人が土地を借りる、あるいは不作の時に小作料の減免を願うには、地主との間に良い「感情」が必要であるという。こうした「感情」関係は社会的立場が異なる二者の間に見られ、同じ立場の友人関係(friendship)とは異なるとフリード氏は述べている(FRIED, 1953 : chap. IV)。

また園田茂人氏は、中国人の人間関係を、「面子」を媒介とし「人情」に支えられた「関係」の網の目と理解している。この「関係」——個人を起点として拡がる他者との紐帯は一様でなく、「自己人」、

「熟人」、「外人」という親疎の違いがあるという。「自己人」とは「分け隔てるものがないくらい親しい」、「自他の境界の曖昧」なほど親身な関係である。この対極にあるのが「外人」の間柄で、「人々は打算的で、互いに協調しあおうとしない。協調したとしても手段的・道具的で感情的な一体感はない」よそよそしい関係である。そしてこれらの中間にあるのが、相手をもたらし利益の可能性を掛け値しつつ、結びつきを構築したり解消したりする「熟人」の関係であると（園田茂人、2001）。園田氏の考察では個人と個人の繋がりには均質なものではなく、親疎や濃淡があるものと理解されている。先の「関係がよい」、「熟知している」、「仲良くしていた」という間柄とは、こうした親しく濃い結びつきと解釈できるだろう。そうした結びつきは共同体の全体性を考慮した協調的、調和的な相互関係とは異なり、個人の間に交わされる強くて柔軟な紐帯である。

3. 農民の協力関係にみる共同性

農民は自分の周囲に様々な他者との紐帯を張り巡らし、生活の便宜や安全弁としている。先に見た耕作や商売での仲間、家の新築や冠婚葬祭の相互扶助などは、そうした他者との結びつきが生み出す協力関係に他ならない。ここでは、そのような協力関係がどのような性格のものなのか考えてみよう。

「親しい」農民どうしの協力関係で特徴的なのは、それが緻密な経済計算に裏付けられない非合理的なものであるということである。農村での借金は多くの場合、利息や担保なしで返済期限も設けない。沙井村の史慶分（41歳）は次のように言う。問い：「金はいつ返すのか」、答え：「あるときに返せばよい。年末にボーナスをもらったときなどに返す。家計の苦しい家にはすぐにでも金が必要なので先に返す。もう一軒には少し生活に余裕ができてから返す。利息もなし、借用書もなしで、完全にお互いの信頼関係によっている」¹⁸⁾。また後家寨村の王維宝（51歳）の応答にも、問い：「冠婚葬祭のとき、お金が足りないとどうするか」、答え：「親戚、友人から借りる。遠縁の親戚の男性が結婚するのに費用が足りないならば、みなで協力して各家ごとに三〜五〇〇元貸す。彼はお金が必要のときに返す。利息、担保はなくてよい」、問い：「契約書は作るか」、答え：「作らない。彼は自分で覚えている。…」とある¹⁹⁾。これらの事例では、借金は厳密な金銭の授受となっておらず、貸し手と借り手の契約というよりも、当事者の間での相互扶助という意味合いをもっている。利息、担保、期限、契約書のない借金は、金額がきわめて多額でないためでもあるが、借り手と貸し手との「信頼関係」——親密な間柄の反映であり、農民の契約観念の希薄さによるものではないだろう。問い：「借りたお金を返さない者はいるか」、答え：「いない。困ったときに借金したのだから、返さないなんてことはない。…」（王維宝）²⁰⁾という応答は、借金の返済が債務の履行ではなく、「信頼関係」の確認であることを示唆している。借金のできる間柄では、厳密な金銭の計算は必要とされていない。

副業や商売における協力関係でも類似したことが見られる。寺北柴村の郝鎖元（46歳）と劉淑珍（43歳）の夫婦は、同村の郝增岐（年齢不明）と聶玉芬（33歳）の夫婦と協力して大規模な養豚業を営んでいる。投資額は10000円で雇い人を1人置き、年間100匹の豚を出荷する。問い：「何故あなたた

ち二人は合併するのか」、答え：「関係がよいから」、…（中略）…問い：「分業はどういうふうにするのか」、答え：「分業することはない。私たち二人[劉淑珍、聶玉芬]は全部一生懸命にやる。…」、…（中略）…問い：「あなた達二世帯は互いに何らかの契約書類があるのか」、答え：「無い。相談してやる。これは帳簿。…意見を交換するために互いに記録している。月末に一緒に清算する」²¹⁾。出資額の10000元は郝増岐と聶玉芬の夫婦の方が多く出資したが、出資額に応じた利益配分がなされている様子はない。しかし帳簿には豚小屋の建設や子豚の買入れなどについて、角や分の単位まで細かく書き留められている。こうした経営協力のやり方は、経営学の知識に欠けるいい加減な経営というわけではなく、「関係がよい」結びつきの自分と他人とを区別しない緊密な協力関係とみなすべきだろう。寺北柴村の徐小眼(67歳)は、友人の郝全福、趙傻子、郝咕搗とともに村の廟会(廟の祭礼)の世話役をしているが、彼ら5人は「みな仲が良い(関係不錯)」ので、仕事に「分担はなく」、「事があればみなで行う」と答えている²²⁾。「関係不錯」の間柄では役割分担という発想はなく、一体化した非合理的な親密さが窺われる。

また寺北柴村の郝秀玉(44歳)は1987年から2年間、姨夫(母の姉妹の夫)と一緒に洋服の卸売り業をしていたことがある。彼は上海、常熟、福州、石獅などで洋服を仕入れ、石家庄の自由市場で売った。仕入れの資金は最初に郝秀玉が5000元出し、姨夫が状況に応じて5000元～7000元出したというが、郝秀玉はそれらをいちいち覚えていない。問い：「二人で商売をして、仕入れの元手がその時その時で違っていたら、利益はどのように分けるか」、答え：「半分ずつ。親戚だから、分けるのにやましく言わない。だいたいいいんだ。出したお金に準じて分けた」²³⁾。郝秀玉と姨夫との親しい間柄では、細かな金銭の計算は水臭く、「半分ずつ」も「出したお金に準じて」も同じであった。

ではそうした細かな金銭授受を伴わない親密な協力関係とは、どのようなものだろうか。深尾葉子氏は陝西省米脂県楊家溝の調査から、「相夥」と「雇」という二つの形態が農村に存在することを指摘している。「相夥」とは、親族や友人などの密度の濃い「関係」において成立する無償の互酬関係であり、「雇」とはそうした特別な「関係」にない者どうしの緻密な経済計算が支配する関係である。村人は状況に応じてこの両者を使い分けるといふ。深尾氏はさらに、仲間どうしの無償の互酬関係を農民の共同性につながるもの、緻密な経済計算による貨幣的關係を市場性につながるものと理解している(深尾葉子、2003)。また岸本美緒氏は明清時代の様々な社会的結合の根底に、「血縁関係になぞえられる直接的な一体感覚が見てとれる」と述べている。岸本氏はそうした結びつきを、「たんなるギヴアンドテイクではなく、他人を自分自身の一部と感ずるような直接的な一体感覚に支えられた無限定な献身」であり、「自立した個人の『協力』というより、むしろ『一人の人物』として合体してしまうような」ものと説明している(岸本美緒・宮嶋博史、1998：417)。借金の相互扶助や商売の協力関係に見られる、細かな金銭計算を越えた親密な結びつきとは、このような無償の互酬性や一体的感覚に支えられたものではなからうか。そこには農民の共同性を垣間見ることができる。

その一方で、こうした協力関係は永続的ではなかった。個人を繋ぐ紐帯は私的な結びつきに終始し、それを越えた公共的な機構を生まないからである。後家寨村の王会遠(77歳)は言う。問い：「[家畜の共同飼育で]途中で喧嘩して別れることはあるか」、答え：「ある。それはしょうがない。役畜

を売って解散する。仲介人を頼んで、値段のことを評価する。…」、問い：「そのようなことは昔あったか」、答え：「あった。共同で商売したりすることはいつも不始末になる。共同で何かすることは『桃園三結義』『蜀の劉備・関羽・張飛の3人が桃園で義兄弟の契りを結んだ故事』のようなものではない」²⁴⁾。何らかの感情の齟齬をきたして喧嘩別れすれば、協力関係は解消されてしまう。「もっとも親疎の度合いは不変ではない。『親』であったものが『疎』になったり、『疎』であったものが、『親』になったり、ということは頻繁に見られる」(園田茂人、2001：183)。沙井村の楊慶余(70歳)は、解放前の家畜の貸し借りについて、兄弟間の協力関係は「互いに損得を計算することを他村民に知られたら恥ずかしい」ので比較的長続きするが、「[兄弟間でも]意見[不満]があることは当然だ。『人無千日好、花無百日紅』[他人との関係がずっと好いままということはなく、花がずっと紅いままということもない]ということだ」と述べている²⁵⁾。

個人の社会的な紐帯のもとで生み出される協力関係は、金銭計算を越えて自分と他人の区別をしない緊密なものであるが、また同時に個人の都合次第で解散してしまうことも頻繁な、両義的な性格をもつものだったといえよう。こうした協力関係は流動的な性格をもち、公的な仕組みに支えられた変化にくい協力関係とは区別する必要がある。しかしまた流動的であることを強調しすぎることも、農村の実態を正しく伝えることにはならないと感じられる。農民は協力関係が流動的であるからこそ、「関係がよい」結びつきの維持に関心を払うし、協力関係は解消されても新たに結ばれ続け、それは一定の均衡と安定を保っていると考えられるからである。

4. 集団の論理と公正の含意

「個人対個人の絆」が構成する社会では、「集団は個人的な関係の輻輳したネットワークのなかにあらわれる」(佐々木衛、1993：32)とされる。したがってそうした場合、集団が帯びる性格も独自のものであることが予測される。人民公社時代の生産大隊や生産隊は、村や近隣・宗族などの農村の伝統的なまとまりにたいして、国家が集団の外皮を与えたものである。ここではこうした「集団」のなかに働く論理を考えてみることにしよう。

生産隊や生産大隊には公社が指示する指標(生産高)を達成する任務があったが、農民が一致協力して労働に励むことはなかなか困難なことだった。労働点数が同じであれば農民は疲れる労働を嫌い、個人に見返りのない作業に責任を持たなかった²⁶⁾。ただし農民は怠け者だったわけではなく、日々の労働において目の前の個人の利益を最大にする行動をとっていたに過ぎない。また彼らは、集団全体にたいする規制と命令が、長期的にメンバーの利益を保証するという信用を信用していなかったとも言える²⁷⁾。そうした意味で、生産隊や生産大隊は決して「集団」ではなかった。それでは、生産隊や生産大隊が凝集性を獲得することはあったのだろうか。

公社時代の寺北柴村には5つ～7つの生産隊があったが、各生産隊の生産高には格差があった。問い：「この村には団結するよい生産隊もあればそうでないものもあるが、どういう原因でか」、答え：「管理がよくないケース、隊長の素質が良くなかったり、家族勢力[宗族の派閥]を作ったりして団結しないのだ。そうした生産隊はよくないし収入も上がらない」(郝小六、40歳)²⁸⁾。「団結」する生

産隊は生産高も高いこと、「団結」の条件として隊長による労働管理や隊長の素質、内部派閥の問題が指摘されている。また1982年から1986年まで寺北柴村の書記を勤めた徐孟祥は次のように言う。問い：「なぜ三隊は[生産高が]良くて、二隊はダメだったのか」、答え：「良し悪しはすべて指導にある。良い指導をする良い隊[長]がいれば、生産も良くなる。会議を多めに開いて、教育を多めにして、隊長が計画を高めにして、指図をよりよくすれば」。彼は隊長の指導力と配慮が、良い生産高を支える団結の鍵であることを力説し、隊長が先頭にたち農民たちを引っ張っていくことの大切さを述べている²⁹⁾。これらの応答から、生産隊の団結と生産指標の達成にとって、リーダーの資質や指導が重要と考えられていたことがわかる。

同様の指摘は公社や村の組織についても見出すことができる。後家寨村の馬会祥は1954年から31年間に渉り村の会計を勤めた人物であるが、公社の発展水準は幹部の良し悪しによって決まると述べている。問い：「これ[十里舖公社の発展水準が県全体では中の下にあること]は県城から遠いということに関係があるか」、答え：「関係ない。主に幹部の問題だ。幹部が良ければ良いし、悪ければ悪くなる。書記などの仕事は非常にエネルギーが必要なもので大変なのだ」³⁰⁾。寺北柴村の徐春梅(49歳)は、城郎公社と聶家庄公社で副書記を務め、調査時には樂城県糧食局業務主任の職にあった農村幹部だが、改革開放以降の寺北柴村の発展について次のように批判している。「いや、幹部が村民を組織しないから、村民はやることがなく、マージャンをするのだ。幹部が村民を組織して、道をつくったり、鶏を飼ったり、兎やあひるを飼ったりすればよいのだ。…老人も若者もみな働くことができる。財富をつくりだすことができる」³¹⁾。公社にせよ村にせよ、個人の集合が有機的なまとまりとなり経済発展を実現するには、幹部——リーダーの資質と手腕が重要であるという発想を窺うことができる。これらの応答から知り得るのは、集団の問題が農民相互の調整や調和の問題としてよりも、すぐれて指導者のリーダーシップの問題として理解されていることである。「幹部が農民を組織して」という徐春梅の言葉には、幹部が核となって村人を巻き込んでいくという構図が見て取れる。

こうした集団のあり方は寺田浩明氏が描く明清時代の「約」の集団によく似ている。寺田氏によれば、「約する」とは、首唱者(率先して主張を行う者)に、周囲の人々が唱和(同調)するというやり方で、人々が意志を統一し行動基準を共有する行為である。「そこにあるのは予め同一の意志をもった人々が集ることによってではなく、むしろある主体が説を首唱しそれが周囲に及んでゆくなかで作られる集団であり、その意味ではその集団構造は、外縁によってではなく中核によって定義される種類のものである」(寺田浩明、1994：96)。また「集団が社会的勢力を誇り、凝集力を持続させるのは、集団の中心にいる人物の社会的な実力のいかんによる」(佐々木衛、1993：32)という指摘も、集団の中核の重要性を述べるものである。生産隊の隊長や村の幹部がリーダーシップを発揮し、周囲の農民を同調させるのに成功した時、人々の集りは「集団」としての内実を備えることになるのである。

ではどのような幹部や隊長が村人の信頼を勝ち得て、彼らを周囲に巻き込むことができたのだろうか。後家寨村で1979年から1984年まで生産隊の隊長を勤めた王子緒(42歳)は次のように言う。問

い：「では結局どういう幹部が良いのだろうか」、答え：「誰にでも良いところと良くないところがある。大まかに言えば、やはり大衆のために仕事をする幹部が良い幹部だ。またことに当たって公正であることが幹部たることの主たる条件だ。公正であれば大衆は支持する」、問い：「ことに当たって公正であるとは、つまりどういうことか」、答え：「公平であるということだ。親しすぎず、冷たくもなく、誰に対しても同じように公平であるということだ」³²⁾。沙井村の劉振海（48歳）は1967年から10年間、村の書記と大隊長を勤めた幹部である。問い「大隊や小隊の幹部になる条件は何か。どんな人が望ましいか」、答え：「大隊幹部たる場合、とくに仕事に当たって強調されるものは公正ということだ。生産隊の場合も公平ということが大切なことだ。また仕事に当たっては真剣に責任感をもって取り組まなければならない。…」³³⁾。幹部経験のある農民の応答は、いずれも、「公正」と「公平」の大切さを述べている。寺北柴村の徐春梅も同じ内容を指摘している。問い：「人民公社時代に寺北柴村はまとまっていたか」、答え：「当時この村は大変貧しかった。文化教育程度も劣っていた。だが先進的な人が指導し、新しい事物を受け入れれば立派にやることができる村だった。良い指導者がなければだめだ。村の幹部が公正で、事の処理に当たって公平で、身内に対しても他人に対しても同じように対処するならば、つまり公社の幹部と同じように公平ならば、大衆に不満や意見はでない。…」徐春梅は「幹部の処理が『一碗水端平』[お茶碗の水のようにまっ平ら]」であることが重要であると述べている³⁴⁾。

こうした「公正」、「公平」という徳目そのものは普遍性をもつが、個人の紐帯で結ばれた華北農村の状況のなかにそれを置いてみると、どのような意味内容をもつだろうか。「親しすぎず、冷たくもなく、誰に対しても同じように公平であるということだ」という王子緒の言葉や、「事の処理に当たって公平で、身内に対しても他人に対しても同じように対処するならば」という徐春梅の発言は、「公正」や「公平」が親しく濃い関係にある者を身びいきしないこと、また疎遠な関係にある者にも考慮を払うことを意味していると思われる。先に見たように村人は、友人、近隣、親戚、宗族などのなかに親しく緊密な結びつきをもち、そうした個人を結ぶ「関係」の繋がりが、借金や商売などの協力関係となって日常生活の様々な局面を動かしていた。農民は自分を中心に拡がる「関係」の束——「圈子」(勢力範囲)を持っており、各人の「圈子」の広さは、その人の学歴や経済的实力などによって異なっている。生産隊の隊長や大隊長も当然、こうした人間関係のネットワークを持っているが、「公正」、「公平」とは、そうした私的な個人の紐帯を優先させることなく、また「圈子」の外に位置する者にたいしても無関心であってはならないという内容を含意すると考えられる³⁵⁾。

実際、幹部が自分の私的な紐帯を利用して知人に便宜を図ることは珍しくなかった。呉店村の趙鳳鳴(年齢不明)は次のように言っている。「私の一族は仲がよくない。だから輩名[世代を示す名前の1文字]を一緒にしない。自分は土地改革のときに、農会の主任に任命された。当初は自分が幹部になったことを宗族の成員はよろこんだが、徐々に仲がまずくなった。…その原因は特別な仲違いの喧嘩があったわけではない。例えば計画生育[一人っ子政策]のときに、宗族の成員にも他の村人と同様に罰金を取ったり、電灯を取り付けるときにも、村中一度に電灯が引けないから、宗族の成員が『走后門』で訪ねてきたが、とりあわなかった。そこで段々気まずくなった。解放直後は仲が

よかった。大食堂をつくったとき、宗族の成員が『走后門』で良い食べ物を要求したが取り合わなかった。関係が悪化した。現在は関係が緩和して、道であっても話をするようになった」³⁶⁾。「走后門」とはコネを利用して裏から手を回すことである。趙鳳鳴の発言から、宗族という「同類」に繋がれた親しい人間関係があれば、幹部は当然便宜を図ってくれるはずだという村人の意識を読み取ることができる。また1969年頃、沙井村で宅地問題が起きた。発端は第一生産隊の土地のなかに第二生産隊の者の家屋が建っていたことに始まる。第二生産隊の者が規則どおりに家屋を建て直そうとしたところ、第一生産隊から猛烈な反対が起きた。第一生産隊の者の言い分は、そこは第一生産隊の土地なので、家屋を解体すれば土地は第一生産隊のものとなるというものだった。当時沙井村の書記だった劉振海は、彼自身は第一生産隊に所属していたが、第二生産隊の家屋を新築しようとした者の立場を認め、第一生産隊に譲歩の斡旋をした。しかし第一生産隊の者は劉振海を「二隊の方ばかりむいている」と非難し、県や北京にまで訴えた³⁷⁾。この問題で劉振海は、彼自身の「やりにくい」立場を「肘を外に向けて捻るようなものだった」と述懐している。第一生産隊という結びつきがあれば、当然便宜を図るべきだという同じ隊の人々の期待を無視した微妙な立場が、劉振海の言葉から窺われる。彼自身も個人の私的な人間関係のなかに身をおく幹部にとって、そうした人間関係を超越して「公正」や「公平」に振舞うことは、一種のジレンマだったともいえよう。

こうした事態において、村人は個人の親しく緊密な人間関係や「圈子」の存在とその利用価値を熟知しており、それゆえ幹部に殊更に「公正」、「公平」であることを求めるのである。コネや縁故による身びいきは私たちの社会でも発生するが、個人を繋ぐ紐帯という私的なネットワークが錯綜する社会構成のもとでは、それは極めて尖鋭な問題として人々の関心を捉えるのではなからうか。深尾葉子氏は、陝西省米脂県の黒龍潭廟の廟会の会長である王克華が、廟会の活動からまったく収入を得ておらず、客人をもてなす時以外、廟の食事にも手をつけないなど、金銭と役得に潔癖な態度を貫いていたことを報告し、「村人の信任を得るにはこうした点で、神経質ほど配慮せねばならないことを王は十分に理解していた」と述べている(深尾葉子、1998: 343)。廟会の会長という立場に絡む人間関係や利権に関与しないことが、村人の信頼を得る条件だったことがわかる。

個人の私的な人間関係から切り離されているという「公正」、「公平」の含意はまた、中国的な「公」の概念とも通底しているかもしれない。溝口雄三氏は講演のなかで、中国の「公」の内容を、一人占めすることなくみなで分け合うことであると述べている。「この間ある中国の友人が、秩序という言葉は公平ということが前提になっていると言いました。中国では、みんなに公平に分配されているということが秩序という意味なんです。…中国人というのはみんなに平等に行き渡るような状態が秩序の状態、つまりそれは公の状態です」(溝口雄三、1996: 148～149)。「公正」で「公平」なリーダーの態度は、村人の支持と信頼を生み出し、生産隊や村に秩序を実現して、集団に凝集性を与えるのである。

5. 対人感情の社会化

個人対個人の紐帯が社会生活において重要性をもつ社会では、両者の間に生じる感情はプライ

ベートな問題ではなく独自の意味を帯びることとなる。ここでは感情を害して不愉快にさせる、恨みを買う（「得罪」）³⁸⁾といった負の感情から考えてみよう。

寺北柴村の劉玉合(49歳)は1963年から1976年まで、生産隊保管員、民兵連長、村の副書記などを歴任した。問い：「何故幹部をやりたい人がいないのか」、答え：「組織の規律性が高くないとか、労働点数が多く稼げないとかの理由で、やらないと宣言するのだ。またとかく人の恨みを買ひ、皆が不満を持つので、やらなくなるのだ」、問い：「どういう時に他人の恨みを買うのか」、答え：「生産に携わっているときだ。やり方がよいとか、それでは駄目だとか、隊長は言わなければならない。すると他人を傷つけることになる。それから村の家族[宗族]関係は大変複雑だ。本家の長輩[世代が上の者]に何か言うと、それだけで本家の人の恨みを買う。…」³⁹⁾。村の幹部が頻繁に交替する理由として、労働の割り振りや仕事の指図をめぐる、他人の感情を害したり、機嫌を損ねたりすることが指摘されている。1955年に寺北柴村の書記だった徐侯(66歳)も次のように言う。問い：「郝蟬月はなぜ[村の]書記に選ばれたのか」、答え：「彼は私と同じで復員軍人だった。彼は暫く[村の書記を]やったが、その後やらなくなった。幹部をしていると、どうしても人の恨みを買うので」、問い：「なぜ恨みを買うのか」、答え：「ものを言うことが多くなると、接する人が増える。扱う事柄のなかには皆の気持ちにそぐわないものもあり、人の恨みを買う。彼は二年間書記をして、ことが起こるたびに話をしたわけだが、関わる人は多いし、説得はきかないし、思い通りにいかないので、あれこれ言って恨みを買った。『一人難称百人心』(一人でやったことは、全員を満足させることはできない)だ」⁴⁰⁾。これらの応答に共通しているのは、村の役職をやめる大きな理由として、他人との感情の齟齬があったということである。村の役職は見返りが少ないといった経済的な問題よりも、役職に付きまとう対人関係の問題の方が深刻であると事態は理解されていた。

幹部と一般の村人との間に生じるこうした負の感情は、なにを意味するだろうか。ここでは幹部の指示や決定が、公共的な規制や命令として両者の私的な関係を越えて強制力を発揮するものになっていない。村の幹部の命令は、個人対個人の対等な関係を背景とするものにとどまり、「他人を傷つける」、「気持ちにそぐわない」指示は、相手の機嫌を損ね「恨みを買う」ことになるのである。他人にたいする感情という私的な問題が、幹部の交替という社会制度レベルを動かしているといえよう。こうした経緯は公社時代のみでなく、1990年代にも見出すことができる。寺北柴村の徐春梅によれば、幹部が村人との間で感情的な対立を恐れることが、村の政治に悪い影響を与えているという。「主たるものは幹部が『好人主義』(よい人になろうとして問題に目をつぶるようなあり方)であったことだ。人の怨みをかうことを恐れ、仕事が大胆でないのだ。…」、「…仕事をするということは、それだけで誰かを傷つけるということだ。もし、村内の道路一つ直せないようなら、仕事などできよう筈がない。それは人の怨みをかいたくないからだ。だが一戸を傷つけないために全村の人々に申し訳ないことをしている。そんなことでは幹部は信頼をなくしてしまう」⁴¹⁾。「怨みをかう」という個人の間での感情が、村の政治運営に重大な影響を持っていることがわかる。

祁建民氏は、村人が文化大革命の政治動乱を「『公報私讐』即ち政治運動に名を借りた個人的な怨みへの報復と考えていた」ことを述べている(祁建民、2006：253)。この場合は個人の間に醸成され

た強い感情のしこりが、政治的なスローガンに名を借りて暴力的騒動を引き起こしたと解釈することができる。こうした事態もまた、個人を結ぶ紐帯から構成される社会の、独特の「かたち」を現わしている。

おわりに

以上では、村人の社会的な紐帯のうえに構築された共同性や集団の特色、個人対個人の間に生じる私的な感情の含意などについて考察してきた。その内容をまとめてみよう。こうした社会構成のもとで取り結ばれる協力関係は、緻密な経済計算を越えた親密なものであり、自分と他人とを区別しない一体的な共同感覚に支えられていたが、同時にまた、感情の齟齬によっていつでも解消され得る流動的なものでもあった。村人が集団としての内実を示すのは、彼らがそのメリットを認めた時であり、集団の形成は中核となるリーダーの資質に左右された。村人がリーダーに信頼と内面的な支持を寄せるのは、彼が「公正」で「公平」な態度を取る場合——リーダーが彼自身の持つ私的な関係網から中立的な立場を貫き、私利を図らない場合であり、そうしたリーダーの態度が人々に秩序と凝集性を与え、集団を有機的な「組織」へと導いた。いずれの場合でも、個人の紐帯が生み出す当事者どうしの感情はプライベートなものにとどまらず、社会制度レベルを動かしていく重要性を持っていた。例えば「恨み」という対人間の私的な感情も、村の役職の交替や政治運営と深く関わった。

ではこれらの考察からなにが分かるだろうか。まず第一に、協力関係や共同性、集団が流動的あるいは動態的な姿をとっているということである⁴²⁾。感情の齟齬によって共同性はいつでも解消され、リーダーに人を得ないなら集団は拡散してしまうが、いったん失われた共同性も別の親密な協力関係の形成により復活し、拡散した村人は新たな優れたリーダーのもとで再結集するだろう。こうした共同性や集団の姿から、村や地域社会を類推してみれば、それらもまた流動的で、動態的な性格を備えていただろうと考えることができる。私たちは搭套や換工などの農耕協力、村廟の祭礼、地域の水利や廟会の組織など、目に見えたまとまりや統合から、歴史的な村や広域的な在地社会の姿を再現するのであるが、それらは凝集と弛緩の濃淡をまとったものとして理解すべきかもしれない。搭套や換工の協力関係を結んだり、廟会への参加が人々の意図的な選択にもとづくものであるのと同様に、個人対個人の紐帯を眠らせ、組織化しないこともまた意図的に選択される行動であるからである。中国社会における秩序や共同性はたえず生み出されては消えてゆく変化と動きのなかで、その総体を保っているというイメージを抱くことができる。そしてそうした変化と動きを孕んだ秩序のもとで、伝統社会はいかに均衡的、安定的に維持されていたのかという疑問が、次の課題として浮かび上がってくるのである。

また第二は、個人対個人の繋がりで構成される関係網と、その外部にある者との関わりについてである。本文中で集団に凝集力を与えるリーダーの条件として、個人の私的な紐帯から切り離され、関係網(「圈子」)から中立であることが望まれると述べた。これは、複数の関係網から成る村や集団を安定させる力が、それ自身の私的な紐帯のなかからは生まれにくく、その外部に位置する別の力

が必要かもしれないことを示唆している。祁建民氏は、近代華北農村における村の役職者（会首）と農民との紛争において、国家（県政府）は両者の関係の外部から調停者として介入し、農民たちはそれを歓迎すると述べている（祁建民、2006：112～115）。国家や公権力とは、個人を結ぶ紐帯から超越した外部者であり、それは「よそよそしく」「親しみ」のないものであるが、複数の私的な関係網を安定させるためには必要であり、人々にとって利用価値を持つものかもしれない。歴史中国における国家の専制的な性格もまた、こうした考察から読み解いていける可能性を秘めている。

なお本稿で残された問題として、中国的な発想により中国内部の視点から表現された集団や共同性の姿を、中国外部からの視点により分析的に表現してみるという作業がまだなされていない。例えば、個人を結ぶ紐帯の親疎については、サーリンズの互酬性の議論を思い起こすことができるだろう（SAHLINS, 1972：chap.5）。サーリンズの議論が親族関係の遠近と深く結びつけて展開されているのにたいし、中国のそれは友人、商売相手など広範な領域における人間関係のなかに個別に見出すことができるという違いを指摘しうが、こうした社会人類学の理論との対比、考察については、大方のご教示をいただければ幸いである。

歴史学は対象となる出来事を通時的な時間軸の上に定位させることを目指している。そしてそうした作業の前提として、時間的、空間的に異なる社会と出来事の解釈が求められているとすれば、視野を共有できる隣接分野へと踏み込むこともまた避けられず、本稿の無謀な試みも了承していただけるのではなかろうか。

注

- 1) 戦後の中国明清史研究において適用された五段階発展論とは、「研究者の分析的・通文化的比較の視点から研究者の用語で」考察する態度だったといえる。これにたいして1980年代以降の方法的「地域社会論」には、「当該文化内部の話者の視点から、話者の用語を用いてその解釈により」考察する態度が含まれている。本稿は後者の態度を共有している。社会人類学の立場から、後者の考察態度の重要性とその問題点を詳述したものに（渡邊欣雄、1990：第1章、238）がある。
- 2) おもなものを挙げれば次のとおりである。1984年～1986年の中生勝美氏による山東省済南市冷水溝村の調査（中生勝美、1990『中国村落の権力構造と社会変化』東京：アジア政経学会）。1984年～1985年の石田浩氏による河北省・山東省・河南省の諸村の訪問（石田浩、1991『中国農村の歴史と経済—農村変革の記録—』吹田：関西大学出版部）。1986年～1990年の佐々木衛氏と路遥氏を中心とした総勢10名の調査チーム（久保田文次、小林一美、座間紘一、佐藤公彦、路遥、陳振江、阮芳紀、程獻）による、山東省・河北省・北京市・天津市の諸村鎮の調査（佐々木衛編、1992）。1992年～1996年の深尾葉子氏ら数名（井口淳子、栗原伸治、羅紅光など）による陝西省米脂県楊家溝村の調査（深尾葉子・井口淳子・栗原伸治、2000『黄土高原の村—音・空間・社会—』東京：古今書院）。
- 3) この「質疑応答録」は戦後『中国農村刊行調査』として刊行された（中国農村慣行調査刊行会、1952～1958）。
- 4) 三谷孝編、2000：68ページ。
- 5) 三谷孝編、2000：140ページ。
- 6) 中国農村慣行調査刊行会、1952：第一巻・村落編。中国農村慣行調査刊行会、1954：第二巻・小作編など。
- 7) 三谷孝編、2000：399ページ。
- 8) 三谷孝編、1999：93ページ。
- 9) 三谷孝編、2000：124ページ。
- 10) 三谷孝編、2000：342ページ。また次のような応答もある。問い：「解放後、互助組の他の「互助帮忙」は」、答え：「家を建てたり、冠婚葬祭等の行事があれば皆で協力する。もしあなたに困ったことが起きれば、私が助け、その逆の場合もあるということだ」、…（中略）…問い：「助け合いの関係は親戚間か、それとも友達同士か」、答え：「普

通は親戚同士、親戚も遠距離だったら無理だ。…」、問い：「農場の仲間と助け合うことは」、答え：「友達同士だから手伝う。…」(沙井村、張麟友、47歳) 三谷孝編、1999：747ページ。

- 11) 三谷孝編、1999：325ページ。
- 12) 三谷孝編、1999：411ページ。
- 13) 三谷孝編、2000：578ページ。
- 14) 三谷孝編、1999：765ページ。
- 15) 三谷孝編、1999：769ページ。
- 16) 三谷孝編、1999：277ページ。
- 17) 三谷孝編、1999：676～677ページ。
- 18) 三谷孝編、1999：726ページ。
- 19) 三谷孝編、2000：110ページ。
- 20) 三谷孝編、2000：110ページ。
- 21) 三谷孝編、1999：245～246ページ。
- 22) 三谷孝編、1999：272ページ、507ページ。
- 23) 三谷孝編、1999：516ページ。
- 24) 三谷孝編、2000：422ページ。
- 25) 三谷孝編、1999：853～854ページ。
- 26) 公社体制のもとの勤労意欲と生産性の低さを述べた応答は多い。例えば「当時は生産隊で作業するときには皆同じで、男でも頑張って仕事をするものなどいなかった。屈んで作業する草取りなど疲れるので男は皆怠けてしまい、彼らが怠けた分を皆女性がやっていた」(沙井村、史慶芬、41歳) 三谷孝編、1999：727ページ。他に、三谷孝編、1999：687ページ：【生産隊長】、三谷孝編、2000：307ページ：【人民公社時代の働く意欲】など参照。
- 27) 公社時代に寺北柴村(生産大隊)の会計、1987年から1994年に支部書記を勤めた郝同順(52歳)は、「大利、小利とあるが、全体としていえば、皆集団を愛している。だが個人の利益が目前にあると、それは集団の利益にまさる」と述べている(三谷孝編、1999：199ページ)。
- 28) 三谷孝編、1999：241ページ。
- 29) 三谷孝編、1999：357ページ。沙井村の張麟書(66歳)も「隊長はどんなことでもやらねばならない。どんなことでも先頭をきって行わねばならない、みなは隊長の後からついてくる。…」と述べている(三谷孝編、1999：687ページ)。
- 30) 三谷孝編、2000：311ページ。
- 31) 三谷孝編、1999：194ページ。
- 32) 三谷孝編、2000：276ページ。
- 33) 三谷孝編、1999：662ページ。
- 34) 三谷孝編、1999：334ページ。
- 35) 幹部の条件として強調される「大公無私」も同様の含意を持つだろう。問い：「書記になるにはどのような条件が必要だと思うか」、答え：「第一は大公無私、自分個人の利益を考えないことだ。第二は刻苦奮闘すること、第三は民兵工作をきちんとやることだ」(寺北柴村、郝全福、56歳) 三谷孝編、1999：322ページ。問い：「よき幹部の条件とはどのようなものだと考えるか」、答え：「最も大切なことは大公無私ということだ。ことに当たって公正であること、多くの人のために働くこと、真面目であり、責任感があることが必要だ」(寺北柴村、郝同順、52歳)三谷孝編、1999：200ページなど。
- 36) 三谷孝編、1993：199ページ。
- 37) 三谷孝編、1999：662ページ。
- 38) 以下の本文で引用する浜口允子氏の応答録で、「恨みを買う」「怨まれる」などの中国語表記は「得罪」であり、それぞれの場で不愉快な感情を醸成することを指している(浜口允子氏のご教示による)。
- 39) 三谷孝編、1999：317ページ。
- 40) 三谷孝編、1999：338ページ。
- 41) 三谷孝編、1999：334ページ。
- 42) 佐々木衛氏は、義和団運動のもとにある華北村落の「結社的な性格」を述べ、社会集団の流動的な性格を論じて

いる（佐々木衛、1993：第8章）。本稿の考察では、社会集団の流動性が運動的な状況下のみでなく、より一般的なものであることを確認できた。

参考文献(アルファベット順)

- 費孝通(FEI, Xiao-tong) 1948 [1985]. 『郷土中国』北京：生活・読書・新知三聯書店。
- 〔鶴間和幸・市来弘志・上田信・王瑞来・川上哲正・武内房司訳 2001. 『郷土中国』「調査研究報告」(学習院大学東洋文化研究所)(49)〕
- FRIED, Morton H. 1953. *Fabric of Chinese Society : A Study of the Social Life of Chinese County Seat*, New York : Praeger .
- 旗田巍 1973. 『中国村落と共同体理論』東京：岩波書店。
- 深尾葉子 1998. 「中国西北部黄土高原における廟会をめぐる社会交換と自律的凝集」『国立民族学博物館研究報告』23(2)、pp. 321 ~ 357。
- 深尾葉子・安富歩 2003. 「中国陝西省北部農村の人間関係形成機構—〈相夥〉と〈雇〉—」『東洋文化研究所紀要』(東京大学東洋文化研究所)(144)、pp. 75 ~ 114。
- 戒能通孝 1943 [1977] 「支那土地法慣行序説—北支農村に於ける土地所有権と其の具体的性格」『所有権』(戒能通孝著作集・第IV巻)東京：日本評論社、pp. 149 ~ 202。
- 岸本美緒 1999. 『明清交替と江南社会—17世紀中国の秩序問題—』東京：東京大学出版会。
- 岸本美緒・宮嶋博史 1998. 『明清と李朝の時代』(世界の歴史12)東京：中央公論社。
- 三谷孝編 1993. 『農民が語る中国現代史—華北農村調査の記録—』東京：内山書店
- 1999. 『中国農村変革と家族・村落・国家—華北農村調査の記録—』東京：汲古書院。
- 2000. 『中国農村変革と家族・村落・国家—華北農村調査の記録—』第二巻、東京：汲古書院。
- 三谷孝・内山雅生・笠原十九司・浜口允子・小田則子・リンダ=グローブ・中生勝美・末次玲子 2000. 『村から中国を読む』東京：青木書店。
- 溝口雄三 1995. 『中国の公と私』東京：研文出版。
- 1996. 「中国社会と公倫理」『愛知大学国際問題研究所紀要』(105)、pp. 123 ~ 156。
- 村松祐次 1949. 『中国経済の社会態制』東京：東洋経済新報社。
- 中根千枝 1987. 『社会人類学—アジア諸社会の考察』東京：東京大学出版会。
- 中島楽章 2002. 『明代郷村の紛争と秩序—徽州文書を史料として—』東京：汲古書院。
- 祁建民(QI, Jian-min) 2006. 『中国における社会結合と国家権力—近現代華北農村の政治社会構造—』東京：御茶の水書房。
- SAHLINS, Marshall 1972. *Stone Age Economics*, New York : Aldine.
- 〔山内昶訳 1984. 『石器時代の経済学』(叢書ユニベルシタス)東京：法政大学出版局。〕
- 佐々木衛編 1992. 『近代中国の社会と民衆文化—日中共同研究・華北農村社会調査資料集—』東京：東方書店。
- 佐々木衛 1993. 『中国民衆の社会と秩序』東京：東方書店。
- 園田茂人 1988. 「中国的〈関係主義〉に関する基礎的考察」『ソシオロギス』(東京大学大学院社会学研究科)(12)、pp. 54 ~ 67。

- 2001. 『中国人の心理と行動』(NHKブックス908) 東京：日本放送出版協会。
- 末成道男 1983. 「社会結合の特質」 橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』 東京：山川出版社、pp. 267 ～ 323。
- 田中恭子 1996. 『土地と権力—中国の農村革命—』名古屋：名古屋大学出版会。
- 寺田浩明 1994. 「明清法秩序における『約』の性格」 溝口雄三編『社会と国家』(アジアから考える 4) 東京：東京大学出版会、p. 69 ～ 130。
- 1997. 「合意と斉心の間」 森正夫・野口鐵郎・濱島敦俊・岸本美緒・佐竹靖彦編『明清時代史の基本問題』(中国史学の基本問題 4) 東京：汲古書院、pp. 429 ～ 443。
- 中国農村慣行調査刊行会 1952 ～ 1957. 『中国農村慣行調査』第1巻～第6巻、東京：岩波書店。
- 上田信 1995. 『伝統中国—〈盆地〉〈宗族〉にみる明清時代』(講談社選書メチエ35) 東京：講談社。
- 内山雅生 1990. 『中国華北農村経済研究序説』金沢：金沢大学経済学部。
- 王崧興(WANG, Song-xing) 1987. 「漢人の家族と社会」 伊藤亜人・関本照夫・船曳建夫編『親族と社会の構造』(現代の社会人類学 I) 東京：東京大学出版会、pp. 25 ～ 42。
- 渡邊欣雄 1985. 「つきあう—〈交際〉の文化人類学」『フォーラム』(跡見学園女子大学文化会)(3)、pp. 51 ～ 64。
- 1990. 『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』東京：凱風社。
- 山田賢 1995. 『移住民の秩序—清代四川地域社会史研究—』名古屋：名古屋大学出版会。

Characteristics of Chinese Society : Social Relationships, Cooperation, and Grouping in Modern Rural North China Communities

Noriko ODA

Chinese society is composed of the bonds that tie one to another as relatives, friends, neighbors, and so on, which set up social networks. This base structure underlies various historical phenomena. This study discusses the distinctive features of cooperation and grouping that form social bonds and characterize traditional societies. The following investigation adopts a synchronical view, and uses surveys in rural north China communities in 1990s as a source.

In the modern rural north China communities, villagers are often connected intimately in business partnerships and debts without considering profit and loss. Although they share collective emotion, their relationships are fragile, and may easily break due to emotional conflicts. The crop yield of the production team in the commune system also depends on the leadership of the team head. When the team leader does not earn profits from his own private economic relationships, and takes a fair attitude toward villagers, they heartily support him, and the production team can be closely united. The proper leader brings cohesion to the community; otherwise the community might collapse.

The above shows that cooperative relationships and grouping ties in modern rural north China communities are fluid and flexible. It indicates similar characteristics of historical societies. Probably the organic system of communities and regional societies in the traditional period is not continuative, appearing and disappearing incessantly. It fluctuates, but maintains itself as an integrative whole. The state that supports such flexible societies must also be a peculiar and dynamic one.